

多胎妊娠

多胎妊娠というと、普通は双胎（そうたい）（双子）のことを言っていることが多いが、中にはひん品たい胎と言って三つ子であったり、要胎（四つ子）、周胎（五つ子）のこともあり妊婦さんにとっては大変なことである。大きなおなかを抱えながら「先生、双子ではないでしょうね？周りの人がおなか大きいので双子ではないかと言うんです。」「大丈夫ですよ、心配ありません。自分が太ったんではないですか？」こんなやり取りの中で、安心する人もいれば、がっかりする人もいるが、双子をはじめ多胎妊娠は多くの問題を持っていて、決して好ましいことではないのである。

一般に多胎妊娠の頻度の概算法としては＜ヘリンの法則＞と呼ばれる $1/80n-1$ （ n は胎児数）の式がはんよう汎用されているが、実際には人種による差異が大きく、我が国の双胎率は150～160の分娩に1回で、三胎は約1万8000の分娩に1回、四胎は約100万の分娩に1回と、いずれもこの式による数値より低い率というのが現状である。ところが、昭和52年頃より多胎妊娠の頻度が上昇の傾向を見せており、排卵誘発剤の使用がその大きな原因と言われている。今では患者さんも良く知っていて、「三つ子とか四つ子は大丈夫でしょうか」と聞く患者さんも少なくない。

私が、最初に三つ子妊娠に関わったのは、心疾患を合併した患者さんで、妊娠を継続できないという状況で人工妊娠中絶をした時であった。当時は超音波断層装置も無かったので、べんしゅつ娩出した胎児を見て初めて三つ子だと分かり驚いたのを覚えている。四つ子にも一度、三つ子はこの数年の間に3例関わった。いずれも子ども達は元気に育っている。数日前も、すでに一人子どもがいて、三つ子を産んだお母さんがナースステーションに来ていた。男の子ばかり4人となり「大変だね、3人とも一緒に連れて帰れるの？」と尋ねると、「大丈夫です、皆で何とか協力して・・・」と笑顔で答えていた。今、ナースステーションのカルテ棚のところに誰が撮ったのか、母親・妹さん・父親に抱かれた三つ子の写真が飾られている。

以前、三つ子だったか、四つ子だったかそのうちのいくつかをエコーを見ながら処置したという記事が報道され問題になった。三つ子、四つ子になると、産むお母さんは勿論その家庭にとって大変なことだけは確かなのである。

お産を取り扱う医師にとっても双子のお産は無事終わるまで休んだ気がしない、というのが本音である。

医局の皆で夕食を食べ解散するところへ、双子の分娩が始まるので来て欲しいとの電話を受けた。私が当番だったが、若い先生二人に「異常はいつ起こるか分からないのでお産を見ていったらどうだ」と誘って分娩室へ急いだ。第一子は無事に産まれたが、第二子のさいたい臍帯が脱出したために緊急の帝王切開となった。無事に済んでホッとしたのを思い出す。第一子分娩後に、第二子が危険な状態になって帝王切開となったケースはこの他にもたくさん経験している。無事に経過した場合にはよいが、双子と分からないでトラブルになったりすることもあり、多胎妊娠というのはいつになっても気の許せない妊娠の一つである。